

産業文化の旅 第二回

東洋のマチュピチュ（愛媛県新居浜市）

武田 竜弥

愛媛県新居浜市の南部、標高七五〇メートルほどの山の中に「東洋のマチュピチュ」と呼ばれる遺跡がある。山間の細い道を抜けると、突如として視界が開け、眼下に石造りの廃墟が姿を現す。地名を東平（とうなる）という。一九一六年、ここに別子銅山の採鉱本部が置かれ、通洞、貯鉱庫、索道基地、インクラインなどの施設が大々的に整備された。最盛期には労働者とその家族あわせて五〇〇〇人もの人々がここに暮らし、集合住宅や学校、病院、郵便局、娯楽場なども設けられた。しかし一九三〇年、採鉱本部が山麓の端出場に移転し、以後東平は山中の廃墟と化していった。

新居浜は、日本三大銅山の一つ、別子銅山とともに発展した町である。一六九〇年、阿波出身の切上り長兵衛という鉱夫が別子山中で銅の露頭を見つけ、備中吉岡銅山の住友家支配



東洋のマチュピチュ（東平）

人・田向重右衛門にそれを報告した。銅精錬業を家業としていた住友（屋号は泉屋）は、翌年幕府から別子の請負稼業の認可を得、銅の採掘を開始した。これが別子銅山の始まりである。別子は開坑からわずか八年で年間産銅量一五〇〇トンを超す大銅山に発展、折から長崎貿易の輸出品として銅の需要が高まっていたこともあり、別子の銅は住友と幕府の双方に多大な利益をもたらした。

明治維新期には幕府との関係が災いし、土佐藩が銅山接収の動きを見せたが、支配人の広瀬宰平（のち住友家総代理人）が懸命の説得に当たり、住友の経営が守られた。このとき土佐藩側の責任者であったのが、のちに三菱の管事から第三代日本銀行総裁となる川田小一郎である。その後広瀬はフランス人技師ルイ・ラロックの助言のもと、銅山の近代化に力を注ぎ、工

都・新居浜の基礎を築いた。一八八八年には臨海部の惣開に洋式製錬所が建設され、その五年後には銅山と惣開の間にわが国初の山岳鉱山鉄道（別子鉱山鉄道）が開通した。また鉱業所本部も一八九九年に山中の旧別子から惣開に移転、採鉱本部も東平、端出場と徐々に山を下っていった。

別子銅山は新居浜の町を大きく発展させたが、一方で深刻な公害問題も引き起こした。江戸時代から続く山中での焼鉱や製錬は豊かであった山林を荒廃させ、煙害は農村部にまで及んだ。一八九四年に別子支配人となった伊庭貞剛（広瀬の甥、のち住友家総理事）はこの問題を解決するため、製錬所を新居浜沖の四阪島に移すとともに、年間一〇〇万本を超える植林事業を開始した。四阪島の煙害問題が最終的に解決されたのは伊庭の死後、一九三九年のことだが、この煙害対策のために立ち上げられた事業会社がのちに住友化学へと発展し、植林事業を進めた別子鉱業所山林課が住友林業の源流となった。

戦後も別子は豊富な銅を産出し、日本の高度成長を支えた。しかし採鉱場所が深くなるにつれ作業のコストは増し、輸入銅との競争も厳しくなっていた。一九六〇年代には別子再生の切り札として海面下一〇〇〇メートルに達する大斜坑が開削されたが、状況を好転させるには至らず、一九七三年、別子銅山はついにその二八三年の歴史に幕を下ろした。この間



別子銅山記念館

の総出鉱量は約三〇〇〇万トン、産銅量は実に六五万トンに及んだ。

別子銅山の歩みを知るにはまず、新居浜駅から南へバスで一二分、別子銅山記念館に足を運ぶとよいであろう。閉山からわずか二年後の一九七五年、住友グループが別子銅山の記憶を後世に伝えるべく開設した。場所は旧山根製錬所の大煙突（登録有形文化財）のある生子

山の麓、別子銅山の守護神を祀る大山積神社の境内である。

坑道を模した半地下式の施設の屋根には一万本のサツキが植えられ、五月には満開の花を咲かせる。入口正面には、一八九二年にドイツから輸入された鉱石運搬用の蒸気機関車も展示されている。

館内は六つのコーナーからなる。最初にあるのが、住友の歴史を紹介する泉屋コーナー。初代・政友の記した家訓「文殊院旨意書」や住友と銅事業の関わりなどが紹介されている。続く五つのコーナーが別子銅山関連の展示で、銅山の歴史や地質、山内の生活、明治以降の採掘技術などがわかりやすく解説されている。中でも注目したいのが、最後に置かれた四

阪島の詳細な模型である。四阪島は現在一般には立ち入りが禁止されているので、この展示は貴重である。なお、住友の別邸及び接待館として利用されていた「日暮別邸」（一九〇六年竣工）は、二〇一八年秋に新居浜市王子町に移築され、住友グループの記念館として活用される予定である。一般にも公開されるとのことなので、ぜひこちらも訪れてみたい。

別子銅山記念館から西へ二・五キロメートルほど行くと、広瀬歴史記念館がある。ここは広瀬幸平の旧邸（国指定重要文化財）と展示館が一体となった施設で、隣接する広瀬公園は桜の名所としても知られる。旧広瀬邸の母屋は一八七七年の建築。二階の「望煙楼」からは新居浜の町を一望することができる。展示館では、別子銅山の発展に尽くした広瀬の生涯がゆかりの品々とともに紹介されている。新居浜駅から直通のバスが出ていないのでアクセスの便がよいとはいえないが、足を延ばす価値は十分にある。

別子観光のハイライトとなるのが、一九九一年に端出場にオープンした複合型産業観光施設、マイントピア別子である。新居浜駅からバスで二〇分、別子銅山記念館のある「山根市民グラウンド」からは八分のところにある。

別子銅山最後の採鉱本部が置かれた端出場には、鉱山鉄道下部線に架けられたピントラス橋（打除鉄橋）や隧道（中尾トンネル）、水力発電所、第四通洞、貯鉱庫など、明治から昭和



観光坑道の入口（端出場）

にかけての貴重な産業遺産が数多く残されている。また一九三七年に住友の接待館として惣開に建てられた「泉寿亭」の一部が移築されているほか、一九六九年に完成した大斜坑の入口もここ端出場にある。

施設は二つのゾーンからなる。一つは本館のある端出場ゾーンで、こちらの目玉は旧火薬庫を利用した全長三三〇メートルに及ぶ観光坑道である。入口までは、かつての下部線の一部を用いた鉱山鉄道（打除鉄橋と中尾トンネルを通過）で移動する。坑内には、江戸時代と近代の銅山の様子がジオラマで再現されている。また銅山の映像を視聴できるミニシアターや採鉱作業を模擬体験できるコーナーなどもあり、在りし日の銅山の姿を体感することができる。このほか端出場には、温泉施設やレストランなども設けられており、子供からお年寄りまで楽しめるようになっていいる。

もう一つは「東洋のマチュピチュ」こと東平ゾーンである。採鉱本部が端出場に移転して以来、東平は長らく山中



東平歴史資料館



インクライン跡（東平）



索道停車場と貯鉱庫の跡（東平）

の廃墟として眠りについていたが、一九九四年、マイントピア別子の見学ゾーンとして甦った。自家用車でも訪れることができるが、道が狭いので、端出場からガイド付きの観光バスかタクシーを利用するのが便利である。

かつて採鉱本部の敷地であった駐車を降りると、右手に東平歴史資料館がある。館内には、東平の歴史や往時の生活を伝える資料が豊富に展示されている。資料館前の展望台から

は、銅山から惣開にかけての雄大な眺めを堪能することができる。遊歩道を抜けた先の広場には、第三通洞や変電所の遺構が残されている。

駐工場を見下ろす旧保安本部の建物は、現在、銅版レリーフづくりなどを体験できる東平マイン工房として利用されている。中では、銅版を使った葉など、別子ならではの土産物も販売されている。そして駐車場の左手、かつてインクラインであった階段を下りると、貯鉱庫と索道駐車場の遺構が見えてくる。今は静寂に包まれた石造りの廢墟を眺めながら、ふと耳を澄ますと、活気に満ちたかつての鉱山町の賑わいが聞こえてくるような気がする。

Trip to the World of Industry and Culture

Part 2

Machu Picchu of the East (Niihama)

Niihama in Ehime Prefecture is known as a leading industrial city in the Seto Inland Sea area. It has grown with the Besshi copper mine which was one of the biggest copper mining sites in Japan. Since the deposits were discovered in 1690, mining in Besshi had continued for 283 years until 1973. It produced about 650,000 tons of copper and made a great contribution to the development of Niihama and Japan. Tounaru, 750 m above sea level, is the district where the mining headquarters were located from 1916 to 1930. At its peak, about 5,000 people lived there and even school and theater were built. But after the headquarters were moved to Hadeba in 1930, the facilities and buildings in Touraru were all abandoned. Today Tounaru is called the “Machu Picchu of the East”. The visitors can enjoy the mysterious landscape of massive industrial ruins in the middle of mountain forest.



武田竜弥 | Tatsuya TAKEDA
名古屋工業大学大学院工学研究科
ドイツ文学・感性社会学
教授